



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3584号 2017.4.5 発行

群馬・富岡市で養蚕業に参入 サンクステンブ、障害者雇用

日本経済新聞 2017年4月5日

人材サービスのパーソルグループで障害者雇用を手がける特例子会社のサンクステンブ（東京・中野）は6月、群馬県富岡市で養蚕業に参入する。3月末で閉園した富岡市立幼稚園の跡地を借り、地元から障害者を雇用して蚕を飼育し、繭を生産する。地域おこし協力隊で蚕の生体展示を手がけた養蚕家が技術指導担当者として常駐するほか、地元の元養蚕農家らも協力する。

ハローワークなどを通じて障害者を募集する。6月にまず5人、2020年までに30人の雇用を目指す。細かい作業も多い養蚕では、工程を明確にすることや一人ひとりの特性を把握することで障害者が活躍できる職域も多いとみている。「集中力が高くものづくりにこだわりを持つ特徴がある」という知的障害者や、発達障害者の雇用を想定している。

世界遺産富岡製糸場を抱える富岡市は古くから養蚕が盛んで、ピークの1968年には3000戸以上の養蚕農家が年間1400トン余りの繭を生産していた。現在はそれぞれ12戸、約5トンと大幅に縮小し、養蚕の復興が市の課題になっている。

サンクステンブは初年度300キログラム、19年度には3トンの繭の生産を目指す。富岡市も幼稚園跡地の賃貸や桑の葉の提供などで協力する。

島根・江津の土木資材会社がトマト栽培設備を増設 障害者雇用を拡大へ

産経新聞 2017年4月5日

高糖度のトマト栽培を手がける島根県江津市の「江津コンクリート工業」が、同市内に栽培施設を新しく整備した。従来取り組んできた障害者雇用を、さらに拡大させる方針。既存施設の生産と合わせ、年間で1億円の売り上げを目指す。

土木資材製造が主事業の同社は、長期的な公共事業の減少を受けて新規事業の開拓を進め、平成26年から農業に参画。これまで農業用ハウス3棟（1035平方メートル）を整備し、トマト栽培に取り組んでいる。

このトマトが市場で好評を博していることから、事業の拡大を目指し、新たに7棟を連ねた1施設（1512平方メートル）を新設。完成を機に見学会を開き、関係者や住民らに公開した。

生産しているのは、大玉とミニトマトの中間のミディトマトに分類される「フルティカ」という品種で、糖度が高いのが特徴。特殊なフィルムを敷いた上に1～2センチの土の層を作って栽培するため、細菌などの混入を防げる上、トマトは水や養分を得ようとして毛細根を多く発生させることなどから糖度がアップする。こうした厳しい環境に置いて育てることから、「スパルタ生まれの笑ちゃん」と名付けて販売している。

同社では、創業当初から障害者雇用に取り組んでおり、農業については現在7人の障害者が勤務。今回の施設整備に伴い、さらに数人程度増やす。現在年間6トンの生産態勢で、新施設が本格稼働すれば計17トンとなる見込み。「本業の土木資材製造に次ぐ主要事業に

成長させたい」としている。

同社産トマトを扱う地元スーパーの担当者は「甘くて味が良く、消費者からも好評。県内の他産地は大玉が中心で競合せず、今後も期待できる」と太鼓判を押している。

「やらにゃん」もっと愛して 胎内の福祉施設 かばんなど6商品

新潟日報 2017年4月4日



胎内市の観光大使を務めるゆるキャラ「やらにゃん」と家族をもっと知ってもらおうと、その姿を模様に使った手提げかばんなど六つ



の商品が出来上がった。同市東本町の障害者通所授産施設「こぼと作業所」が製作＝写真＝。ティッシュ入れやお弁当袋など子どもにも使ってもらえる品物に仕上げた。道の駅胎内で販売しており、職員は「温かみのある商品を手にとってもらいたい」と呼び掛けている。

こぼと作業所は10～70代の47人が段ボールの組み立てなど約10種の作業を企業から請け負っている。

やらにゃんは体験型ご当地検定「胎内検定」のPRキャラクターとして2010年に誕生し、その家族は15年に登場した。市観光協会が認知度を上げようと商品化を企画した。

手提げかばんは、長く使えるようにキルト地に加工するなど工夫を重ねた。他にはクリップでズボンに留めて使うポケットやティッシュケース、コップを入れる袋があり、施設利用者が一针ずつ丁寧にステッチを入れた。女性（30）は「かわいい布を使えて楽しい。新しいバッグにも挑戦したい」と喜ぶ。

職員の女性（43）は「オリジナル商品作りは施設利用者の励みになる。心を込めた仕事を感じてほしい」と話した。

商品は道の駅胎内で購入できる。価格は250～1100円。問い合わせは市観光協会、0254（47）2723。

森永ヒ素ミルク事件で調査 障害被害者死亡リスク3倍 共同通信 2017年4月4日

森永乳業（東京）の徳島工場で1955年、粉ミルクに工業用ヒ素が混入した事件で、中毒の影響で障害がある被害者は推定死亡率が一般平均の約3倍との疫学調査結果が出ていたことが4日、支援団体「ひかり協会」（大阪市）への取材で分かった。

脳性まひなどの影響で食べ物をのみ込む力が衰えて肺炎になるなど、障害が死亡リスクにつながっているとみられる。協会は「重度の被害者に対するサポートの必要性が浮き彫りになった」と指摘している。

協会によると、調査は大阪国際がんセンター（旧大阪府立成人病センター）に委託した。

介助犬の理解広める 平野さん 県バリアフリー賞 最優秀 中日新聞 2017年4月5日

重い身体障害があり、県内で唯一の介助犬「タフィー」（ラブラドルレトリバーの雌、七歳）と生活する金沢市福増町の平野友明さん（48）が、県バリアフリー社会推進賞の活

動部門で最優秀賞に選ばれた。タフィーと妻克美さん（48）とともに小学校などで精力的に講演活動をし、介助犬への理解を広めたことが評価された。



（山内晴信）

県バリアフリー社会推進賞の活動部門で最優秀賞に選ばれた平野友明さんと介助犬「タフィー」＝金沢市内で

県内外で精力的講演評価

受賞について「自分が受けるようなものじゃないと思っていた。周りの人のおかげだと思う」と恐縮した様子で話した。

平野さんは二〇〇九年に仕事上の事故で手足が不自由になり、電動車いすでの生活を送る。一二年にタフィーを迎えると、公共交通機関を利用して全国各地に出掛けた。昨年七月には病室で生まれたばかりの初孫歩夢ちゃんを抱くこともできた。

一三年以降、県内外の小学校などで五十回ほど講演し、経験を伝えてきた。昨年は二十二回講演。タフィーがいるから自身の生活が成りたっていることを強調し「介助犬を含む補助犬を受け入

れてほしい」と呼び掛けている。

県内には介助犬の訓練施設がない。平野さんは「補助犬を持ちやすい環境整備が進んでいない」と指摘し、受賞を機に行政に施設の整備や助成の充実を求めていく考えだ。

同時に周囲の人に補助犬を受け入れるよう呼び掛け、障害者が補助犬を持ちたいと言いつける環境整備を進める。「並行してやっていかないと（補助犬の普及は）うまくいかないと力を込める。

多忙な克美さんに配慮し、今後は一人で講演活動を続けることも視野に入れる。「自立を進めていきたい」。新たな目標に向けてタフィーと歩んでいく。

介助犬 身体障害者補助犬法で盲導犬や聴導犬とともに「補助犬」とされる。訓練事業者によるトレーニングを受けて国が指定する法人が認定する。物を拾って渡したり、扉を開けたりと障害者の身の回りの世話をする。



袖ヶ浦の事業所に軽乗用車1台寄贈 日本財団

東京新聞 2017年4月5日

袖ヶ浦市戸国飛地の障がい福祉サービス事業所「わたぼうし」に、日本財団から車いすも送迎できる軽乗用車一台が寄贈された。

同事業所は定員五十人。君津地域四市を中心に、知的・精神障害のほか、身体障害者を通所や入所で受け入れている。担当者は「車の老朽化が進んでいたため、送迎が快適にできるようになり、ありがたい」と話した。（山口登史）

潮干狩りの安全を祈る 津・御殿場海岸で浜開き式

中日新聞 2017年4月5日

潮干狩りシーズンの安全を祈願する出席者＝津市藤方の御殿場海岸で

潮干狩りの名所として知られる津市藤方の御殿場海岸で四日、浜開き式があり、海の家や行政の関係者ら約六十人がシーズン中の安全を願った。

御殿場海岸の海の家でつくる津御殿場海岸浜



洲観光事業協同組合が主催。快晴の空の下、近くの結城神社の神職による神事があり、出席者が玉串をささげた。津市内の障害者施設の利用者ら約四十人も招かれ、潮干狩りを楽しんだ。

組合によると、同海岸ではマテガイやハマグリ、バカガイが採れ、六月ごろまでがシーズンという。山岡高根理事長（56）は「今年は特にマテガイが多く育っている。バター焼きや酒蒸しにするとおいしいので、多くの人に来てほしい」と話した。（河郷丈史）

県警 HP、初リニューアル 高齢者も見やすく、外国語も対応 /宮崎

毎日新聞 2017年4月4日

県警はホームページ（HP）を1999年の開設以来、初めてリニューアルした。画像を多く使い、文字を大きくすることで高齢者にも見やすいデザインとなった。自動翻訳機能や音声読み上げ機能も新しく追加することで外国人や障害者に使いやすくなった。

新しいHPは3月15日にスタート。「特殊詐欺」や「サイバー犯罪」「交通事故統計」など県民の関心に合わせて項目を並べた。これまで刑事部や交通部など部署ごとに表示されていた情報より分かりやすくしたという。自動翻訳機能では英語や中国語、韓国語など17カ国語に対応し、見やすいように文字のサイズや背景色を変更できる。

警務部の田中元広報官は「県民にも外国人にも使いやすくなった。事件事故の被害に遭わないよう情報を集めるなど活用してもらいたい」と話した。【宮原健太】

長野県内の多分野14業者、地域の結節点に 「交流の駅」 広げる観光ネットワーク

産経新聞 2017年4月5日

人が集まる結節点を県内各地に設けて観光や地域コミュニティーの活性化につなげようと、県中小企業団体中央会（長野市）は、道の駅や農産物直売所、伝統工芸の展示・体験施設などさまざまな分野にわたる14業者を「交流の駅」として認定し、ネットワーク化する事業をスタートさせた。同中央会は「駅のように人が集まり、触れ合いが広がることで地域に新たな魅力が生まれる。そんな相乗効果を期待したい」としている。

「交流の駅」は、一般財団法人国土計画協会（東京）の「高速道路利用・地域連携推進プラン」を活用した助成事業。人口減少が進むなかで地域の住民同士、あるいは住民と観光客の交流機会を増やすとともに、県内の周遊を促して元気を呼び込む起爆剤とする狙いがある。

モデルとなったのは、旧武石（たけし）村（現上田市武石）で都市住民の農村体験受け入れや農家レストラン経営などに取り組む農業生産法人「信州せいしゅん村」だ。国内の農業の将来に危機感を抱いた小林一郎社長（66）が平成10年ごろから、農家同士の交流を深めることで地域の活性化に努めてきた。現在は国内だけでなくアジア各地から教育旅行の受け入れも行う。

信州せいしゅん村の日帰り農業体験施設には年間約8千人が訪れ、にぎわいを創出する。小林社長は「中山間地からどんどん人が減っている。しかし、外からたくさんの方が訪れることで元気が維持できる。そのために3年前に農家レストランを開いたころから『交流の駅』と名付けて活動を加速した」と話す。

この取り組みに注目した同中央会は、施設の性格や業態の枠を越えた多様性も魅力の一つと考えた。食や農業、地域の暮らしなどのさまざまな体験や交流活動ができる場所をネットワーク化し、人の動きを促して経済活動を盛り上げるという構図を描く。

第1弾の認定施設は信州せいしゅん村のほか、障害者がカフェやパン工房を運営する「まるこ福祉会」（上田市）▽河川に絡んだ体験ができる「上田道と川の駅おとぎの里」（同）▽御柱祭体験施設を活用した観光施策に取り組む「諏訪湖温泉旅館協同組合」（諏訪市）▽松代焼の陶芸体験を楽しむ「松代陶苑」（長野市）▽野菜直売所や娯楽施設がある「道の駅

小坂田公園」(塩尻市)ーなどだ。

県中小企業団体中央会は、交流の駅の宣言と行動憲章に賛同する事業者を認定してネットワークをより強固なものとするをを目指す。井出康弘事務局長(61)は「中央会として観光の分野で組織化を図るのは初めて。観光の素材と地域コミュニティーを盛り上げる一石二鳥の施策として活用していきたい」と先を見つめた。

幼稚園児テープ虐待、別の園児に手伝わせる 愛知・岡崎 大野晴香

朝日新聞 2017年4月4日

愛知県岡崎市の学校法人青山学園(青山秋男理事長)の「やはぎみやこ幼稚園」で、職員が粘着テープで男児の手足を縛ったり、口をふさいだりしていた問題で、職員が別の園児に手伝わせていたことがわかった。男児を縛る際、テープを伸ばすなどの行為を手伝わせていたという。

園側は4日、この問題に関して、2月に保護者に配布した資料を公表した。資料によると、園の女性職員が2月10日、粘着テープで男児の手を縛った際、別の園児にテープを取りに行かせ、さらに縛るためにテープを伸ばすのを手伝わせたとされる。ほかの園児も周りで見ていたという。

この幼稚園では2月9日にも別の女性職員が粘着テープで同じ男児の手足を縛り、口にも粘着テープを貼っていた。園は「虐待行為にあたる」として、男児の保護者に謝罪。県は「不適切な行為」として口頭で指導している。(大野晴香)

「信頼に背く行為があり、申し訳なかった」男児へ虐待行為認め謝罪、愛知の幼稚園運営法人

産経新聞 2017年4月4日

愛知県岡崎市の幼稚園「やはぎみやこ幼稚園」で女性教諭が男児(5)の手足を粘着テープで縛っていた問題で、幼稚園を運営する学校法人青山学園の青山秋男理事長は4日午後、同市で記者会見し、虐待行為があったことを認めた上で「信頼に背く行為があり、申し訳なかった」と謝罪した。

青山理事長によると、虐待行為があったのは2月9日と10日。男児の手足を縛った20代の女性教諭2人と幼稚園の園長を減給処分にした。男児は既に退園したという。

2月24日には保護者への説明会を開き、27日には教職員の研修を増やすなどとする再発防止策をまとめた文書を保護者に配った。

園は県に対し「男児がほかの園児をたたいたり、蹴ったりすることが常態化していたため」と説明。手足を縛ったのは3~5分ほどで、口をふさいだのは数秒だとしている

命の尊さ学び福祉考えて ベトナムの結合双生児ドクさん、広島国際大客員教授に

産経新聞 2017年4月5日

ベトナム戦争で米軍が散布した枯れ葉剤の影響とみられる結合双生児として生まれたグエン・ドクさん(36)が、広島国際大(東広島市)の医療福祉学部の客員教授に1日付で就任した。

大学によると、年に数回来日し、結合双生児として生まれた体験に基づき、平和や命の大切さについて講義する予定。

昨年10月に広島を初めて訪れた際、久保田トミ子副学長と知り合い、「日本にもっと来る機会がほしい」と話したのをきっかけに就任が決まった。

大学広報室は「命の尊さを学ぶことは福祉を考える上で欠かせない。学生にとって素晴らしい機会になる」と期待感を示した。

ドクさんは結合双生児の兄、ベトさん(故人)とともに「ベトちゃんドクちゃん」の愛

称で呼ばれた。

石井十次賞に福島一雄氏 宮崎

産経新聞 2017年4月5日

宮崎県高鍋町の公益財団法人石井十次顕彰会は、児童福祉分野の功績をたたえる「第26回石井十次賞」に、社会福祉法人共生会（東京都葛飾区）の福島一雄理事長（80）を選んだ。運営する児童養護施設で少人数のグループホーム制を取り入れ、家庭的な雰囲気を大切にしていることなどを評価した。



カタログの商品購入し社会貢献 県NPO・ボランティアセンター発行、福祉作業所などを支援【福岡県】

西日本新聞 2017年04月05日
多くの写真で商品の魅力を紹介している「つなぐっずカタログ」

県内のNPOやボランティア団体が社会課題解決につなげるために販売している商品をまとめた小冊子「つなぐっずカタログ」

（A5判、22ページ）を、県NPO・ボランティアセンターが発行した。2500部作製し、福岡市博多区吉塚本町の県吉塚合同庁舎にある同センターなどで無料配布しているほか、センターのホームページからダウンロードもできる。

県内11団体が販売している27種類の商品を紹介。フィリピンのスラム街で暮らす女性が手作業で刺しゅうを入れたハンカチ、昔ながらのハゼのろうから作った和ろうそく、ロシアの人形マトリョーシカといった個性的な品々が掲載されている。各団体は、スラム街の女性の経済的自立や久留米市のハゼ並木景観の保全、チェルノブイリ原発事故の被災者らが働く福祉作業所の支援などが目的で、カタログに書き添えている。

県によると、NPOやボランティア団体には知名度や収入の不足で活動を諦めざるを得ないところもある。「つなぐっず」の名称は、市民の「社会貢献したい」という思いと、「活動を広げたい」という団体の思いをつなぐ商品という意味で名付けられた。同センターは「気軽にカタログを手にとって商品を試してほしい」としている。

子どもや高齢者防犯パンフ 県読売防犯協力会

読売新聞 2017年04月05日

県内の読売新聞販売店（YC）でつくる県読売防犯協力会は4日、子どもや高齢者が交通事故や犯罪に遭わないための留意点をまとめた3種類のパンフレット計3000部を都城署に贈った。同署は防犯イベントで配布したり、福祉施設に置いてもらったりする予定。

パンフレットは「子どもを守る安全対策」、「高齢者を守る安全対策」、「安心・安全なネットの使い方」。交通ルールや特殊詐欺への対応策などを紹介している。全国のYCでつくる全国読売防犯協力会が製作。県協力会は2015年から毎年、同署への寄贈を続けている。

4日は県協力会の松田陸夫会長（YC大塚中央）と内村孝志副会長（YC都城五十市）が同署を訪れ、黒木義彦署長に目録を手渡した。松田会長は「パンフレットを通じて、防犯などの一助になれば」と話し、黒木署長は「大変ありがたい。有効に活用します」と感謝していた。

発達障害児の保護者がサポート ペアレント・メンター始動 愛媛新聞 2017年4月5日

発達障害児を育てた経験のある親が同じ境遇にある保護者をサポートする「ペアレント・メンター」の活動が県内で本格的に始まった。養成事業に取り組む愛大医学部子育て研究会（代表・西嶋真理子愛媛大大学院教授）が“先輩”保護者10人をメンターに登録し、3月にグループ相談会を初めて開いた。子どもが障害の診断を受けた母親らの不安に寄り添いながら、必要な支援ニーズを探っている。



発達障害のある子どもを育てる母親の相談を受けるペアレント・メンター＝3月28日、大洲市東大洲

「話しかけてもおおむ返しが多い。思うようにいかないと自分の手をかむこともあるんです」「うちの子は年長の秋まで喃語（なんご）だけ。ある日急にやりとりができるようになりました」「うちもお店でひっくり返っていた。成長していく中で、しなくなるから大丈夫」

3月28日、大洲市東大洲の市総合福祉センターに自閉症などの子どもがいる母親4人が集まった。このうち3人は同市や内子町在住のメンター。5歳児を育てる母親が子どもの特性や就学の悩みを話すと、メンターは自身の経験や発達障害児への小中学校の支援状況を紹介した。

ペアレント・メンターは、共感性の高い相談や当事者目線での情報提供ができるため、家族支援に効果があるとされる。日本自閉症協会（東京）が2005年度から人材育成を進め、10年度からは厚生労働省が施策化。助成を受けた都道府県や政令市が養成事業を展開し、全国的に取り組みが広がる。県内は日本学術振興会研究の一環として同研究会が独自で16年度に始め、昨年11月の学習会で傾聴技術などを身につけた30～50代の保護者がメンターになった。

相談に来た大洲市の40代女性は「温かい雰囲気の中、経験者のさまざまな話が聞けて心が軽くなった」とにっこり。長男（18）に高機能広汎性発達障害があるというメンターの中川紀子さん（47）＝同市＝は「周囲に悩みを相談できないなど親の不安は変わってない。今は仕事をしている人も多いので、育児との両立へサポートがあればと感じた」と語った。

ペアレント・メンターを地域支援として定着させるには、メンターのマッチングや支援機関とのつなぎ役を担うコーディネーターの確保などが求められる。同研究会は今後、行政や支援機関の協力を得るなどして運営組織を設立し、活動を活性化させたい考え。

西嶋代表は「発達障害の支援体制には地域差があり、家族が社会から孤立しないケアが必要とされる。個別相談なども実施し、互いに支え合う仕組みをつくりたい」と話している。

高齢者が元気に一人暮らしをするには 瀬川茂子、田村建二 朝日新聞 2017年4月5日

身近な人の死をきっかけに一人暮らしになる高齢者は少なくない。元気で自立した生活を長く続けるカギは、栄養と体力維持、積極的な社会参加にある。ただ、一人暮らしだと持病が悪化しても気付かれにくく、注意が必要だ。

■意識して孤立を防ぐ

10年前に妻を亡くし、一人暮らしをする国立がん研究センター名誉総長の垣添忠生さん（75）は、週末にまとめ買いした食材で毎日朝食を作る。牛乳やヨーグルト、野菜、納豆、果物など栄養バランスを考え食品の種類にも気をつかう。炊いたご飯の半分は冷凍し、サケを多めに焼いてほぐして冷蔵する。後日、電子レンジで温めたご飯とサケにのり

と漬けものを添えれば好物のサケ茶漬けが簡単にできる。

元気な一人暮らしのコツ



食事の留意点

● ほぼ毎日、10種類の食品を食べる

- | | | | |
|-----------|--|-----------|--|
| ● 肉 | | ● 緑黄色野菜 | |
| ● 魚介類 | | ● 海藻類 | |
| ● 卵 | | ● いも | |
| ● 大豆・大豆製品 | | ● 果物 | |
| ● 牛乳 | | ● 油を使った料理 | |

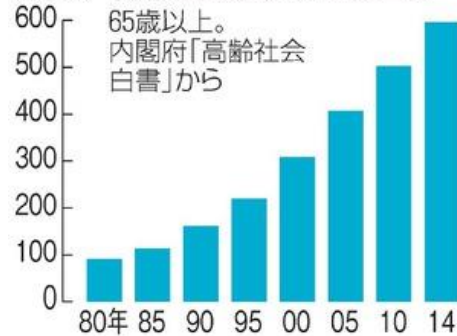
● 1食の中で、主食、主菜、副菜を



何もしない人では、差が拡大する」と話す。

内閣府の高齢社会白書（2016）によると、65歳以上の一人暮らしの世帯は30年前に比べて5倍以上に増えた。14年の65歳以上の人がある世帯のうち、31%が夫婦のみで25%が1人。子どもとの同居率は1980年に約7割だったが、14年に4割だった。この傾向が続けば、一人暮らしの世帯はさらに増える。

(万世帯) 増える高齢者の単独世帯



レパートリーを広げるために人に聞いたり新聞記事で見つかったりしたレシピにも挑戦する。「料理は実験のようなもの。レシピを見て2、3回試行錯誤する。最近、菜の花とシラスのパスタを作ったよ」と笑う。

平日は仕事に出かける。最新の論文を読み、頭を使うようにしている。夜は仲間とお酒を楽しむ機会も多い。分野が違う人と話すと刺激を受けるといふ。「意識して孤立しないようにしている」。毎朝、腕立て伏せ100回などの筋トレとストレッチに約1時間かける。継続が重要なので、出張先でも必ずやる。

加齢により、筋力や反射神経、視力、聴力だけでなく記憶力なども衰えていく。垣添さんは「高齢でも元気な人はとても元気。鍛えている人は、体の動きが速く、表情も違う。頭もさえている。自己管理する人と

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

